climaxヒーロー！！

エセ悪魔

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

個性という異能を使える世界で辛い過去を持つ野上良太郎、乾巧、城戸真司の三人によるヒーローアカデミア。

初投稿です!!

投稿ペースは最低でも皆さんが忘れかけた頃位には更新するつもりでございます。

要素としては、

・この三人にはヒロイン付けました

・味方イマジンは全部揃える

・性転換キャラは連、弔（予定）
人によってはつまらない話だと思います。
※顔文字などあまり使えません。
誤字脱字があったらお教え頂きたくございます。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

目次

始まり ―――― 1
野上良太郎編　パート1 ―――― 7
乾巧編　パート1 ―――― 19
城戸真司編　パート1 ―――― 30
悪魔の科学者 ―――― 38
野上良太郎編　パート2 ―――― 43
乾巧編　パート2 ―――― 51

始まり

「ハハハハハハハハハハハハ!!!!!」

火が燃えさかり、瓦礫の山にガラスは散らばってボロボロな床の上で少年が泣いている。

それをまるで子どものような恥じらい無しに笑う〔敵〕ヴィラン。

「おら!!」

突然だった。笑い続けるヴィランをぶっ飛ばし、泣いている少年にむかってこう叫ぶ。

『「俺、参上!!そこの君!ケガねぇか?」』

「相変わらず乱雑だな・・・」

「もうちょっと愛想よくしたほうがいいよ。君だけの体じゃないし。」

『「うるせ!!なっ?良太郎!!」』

『僕のネットでの評判が主に荒々しいってなってたんだけど・・・・』

『「お前だけは仲間だと思っていたのに!?」』

「もう、皆しっかしとしようよ!!」

これは僕、俺たちが
最高のヒーローを目指す物語。

外伝〔ビルド〕

「桐生さん！こっちお願い！」

「分かりました!!」

俺の名は桐生戦兎。物理学者だ。それも天・才の・・・・だが俺が今やっていることと個性は、生物学と細胞学だ。

俺の個性は触れることによって、細胞やウイルスを別の物質に変えれる。

そして今、俺は個性の研究所で働いている。と言っても下働き・・・・

発明でお金貰える生活に戻りたい・・・

天才ではあるんだよ・・・今までに武器開発とかしてヒーローたちに貢献してきたのに、周りから危険などなんだのと言われて評価だだ下がりして今ここで下働き。

チャーチャーチャーチャチャチャチャチャ

電話が鳴った。相手は・・・万丈か。

「なんだ万丈、プロテインを忘れたか？」

万丈　龍我。ヒーロー「ドラゴンクローズ」で活動している。筋肉野郎のくせに女性に人気があって色々と腹立つ野郎。そんなやつだけど俺の仲間だ。

『んなぁわけねぇだろ!!肌身離さずプロテインを持ってる!!』

「で、用事はなんだ？」

『お前数年前まで開発してたろ？俺今年から雄英の体育教師するんだけど「お前が教師？ハハハハハハハw万丈おま、最高なジョークだよw」うっせー!話は最後まで聞け!!』

『開発の教師が人手が欲しいと呟いてたからお前のことを教えるとぜひ呼んで欲しいと言われて、校長にも話は通ってる。こないか？報酬はいいぞ。』

「よし乗った辞表を出してくる。」

『待て待て!まだ３ヶ月後の話だ!!』

「なんだよそれ早く言え。今上司に声かけそうになったじゃねぇか。」

『お前そんなに辞表出したかったんかよ!!』

「・・・・なんでそう思った。」

『お前が辞表を出そうとした時間がスゲェ短すぎる。だったらその仕事嫌ってるお前は辞表を既に書いているはずだ!!』

「チッ・・・サルのくせに鋭いやつが」

『誰がサルだ、だｒ』ピッ

よし後三ヶ月経ったらこことおさらばだ。

まぁこれまでお世話になったここで少しだけでもしっかり働いてやろう。

「楽しみだなー雄英。」

野上良太郎編　パート1

僕の名前は「野上　良太郎」

僕がいる時代は個性とかいう異能が当たり前になった時代。世間では持て余した個性で犯罪活動に明け暮れる敵って犯罪者とそれを打倒するヒーローって職業が脚光を浴びていた。

ただ個性なんて明確な才能の物差しが出来たこの超人社会、どうしても個性絡みで苦しむ人間というものも出来てしまって、個性が弱かったり、或いは犯罪向きだったり、そういう個性を持った人間はなにかと虐げられたり拒絶されてしまったりしてしまう。僕もその一部の人間なのだと思う。

家族は母親はマッピング、父親は物体加工、姉は液体操作のごく普通な家族。だけど、そんな僕の個性は結構変わってる。

小学４年生

「おら、なんかいえよ!!」

ガスッ！ガスッ！と僕は複数から蹴られていた。僕は毎日皆から虐められて、小遣いは何処かに落としたりと不幸である。そんな時に僕を助けてくれるのは、

「あなた達!!何やってますの!!」

「やべ、八百万だ!!」

僕を虐めてた皆は鬼でも見たかのように急いで逃げていった。

「大丈夫ですの？野上さん。」

彼女は八百万　百。僕をいつも助けてくれる僕にとってヒーローな人。
家が金持ちだけど決して傲らずに誰とでも丁寧に接してくれる。

「これくらい・・・大丈夫だよ。」

『なーにやってんだ良太郎。あんなやつら俺たちに任しとけばいいんだよ！』

頭の中で声が聞こえる。僕と同じだけど、とても荒々しい。

『せやで良太郎。それに悔しくないんか？』

「そ、そんなこと言われたってモモタロス達に任したら・・・あの子たちが死んじゃうよ!!」

「？」

八百万さんは？マークを頭に浮かべてたけど、そう僕の個性は多重人格。

今は４人の人格と会話ができて、人格を入れ替えることによってパワーが上がったりと何かと便利で謎な個性。これは八百万さんにも教えてない。・・・僕の個性は端から見るとただの頭のおかしい人に見えるし・・・個性のせいでイジメにあったことも多くて・・・正直言って怖かった。

人格は

荒々しく鬼っぽいことから〔モモタロス〕、いつも女性を口説いて頭がよく何か裏があ

りそうなことから〔ウラタロス〕、関西弁で演歌が好きで相撲好きから〔キンタロス〕、一度入れ替わったときにダンス大会で優勝した時に使われた名前から〔リュウタロス〕の四人。

『じゃあ、今度こそ僕たちにまかせなよ。後ちょっと入れ替わるよ。子猫ちゃんと話したいし。』

「ちょ、ウラタロス！」

ひゅんと背筋が伸び、目と髪の一部が青いメッシュになる。

『「久しぶりだね、子猫ちゃん。」』

「えっ？久しぶり？」

「『そうだよ。僕は君とずっと話してみたかったんだ。』」

流れるような手つきで肩に手を置き、髪に触れる。

「えっ、／／／わっ、の、ののの、野上さん?!?!」

『ウラタロス止めてよ！えい！』

ウラタロスに任したら僕は女性に追い掛けられちゃうんだよ!!

小学生の時、ウラタロスに一日中体貸したら盗んだ財布に女性の電話番号５０以上!!

あの時、魂が上に行くようなほど肝が冷えたよ!!

『「わぁーと！」』

無理矢理意識を僕に戻した。そしてすぐに八百万さんから離れる。

「ご、ゴメンね！」

「ちょっ、ちょっと待ってください！野上の個性って、一体何ですの？」

「・・・・八百万さんに言っていいかな・・・・モモタロス、ウラタロス、キンタロス、

リュウタロス・・・」

『別に八百万ならいいんじゃねぇか?』

『僕も今回だけはセンパイに賛成。これで僕も子猫ちゃんに知ってもらえるしね。』

『俺もモモの字に賛成や。』

『僕も僕も!百ちゃんと話したい!』

「じゃあ、教えるね・・・・」

そうして、僕は八百万に個性のことについて全てを話した。

それを話すと、「すごいですわ!」と言ってくれて嬉しかった。

そしてこの後、事件が起きた。

「じゃあ、終わりのか――」

ズガン!!

「餓鬼共動くな!!」

先生が話そうとした瞬間に教室のドアが爆発して先生の頭に破片がぶつかって先生は倒れた。外から黒い格好をした男組二人が入ってきた。間違いない、「敵〔ヴィラン〕」だった。片方は猟銃を持っている。

皆は逃げようと後ろに下がろうとするがヴィランの一喝で誰も動けない。自分も動けず震えていた。

「・・・・見せしめとしてこいつを殺そう。」

八百万さんがヴィランの一人と目を合わしてしまい、近づいてくが腰が抜けて動けずにいる。

「うわ・・・・あぁ・・・」

「八百万さん!」

僕は急いで間に入ろうとするが、ヴィランの指はもう八百万さんの方向に構える。

『ここは俺に任せとき!!』

意識が入れ替わる。

『どすこい!!』

「なっ?!ガハッ!!!!」

僕は今髪に金色のメッシュで金色の瞳になった。そうキンタロスと入れ替わった。そして素早い動きでヴィランに強烈な張り手を食らわし、ヴィランは吹っ飛んで黒板に亀裂が入るほどに打ち付けられた。

そして首を鳴らして、
『俺の強さに、お前が泣いた!!』
「の、野上さん・・・・」
「野郎!!」
もう一人がこちらに向いた瞬間、
『今度は僕に僕に!・えい!』
『おいリュウタ!』
また入れ替わる。今度は紫色のメッシュで紫色の瞳。
ステップを踏みながら、こうヴィランに問う。

「『ねぇ、お前を倒すけどいいよね？答えは聞かないけど。』」

「な、なっ、ふざけやがッてぇ!!!」

ヴィランは銃を僕に向かって乱射し続けるがそれをダンスしながら避けていく。

「ち、畜生!!」

「『えい！』」

ダンスのステップと共に蹴りを入れる。

こうして事件は終わった。

この事件の後、僕は病院に運ばれ、検査を受けた後に警察から事件について同じことを何回も聞かれて大変だった。

それにヒーローからとんでもない説教を受けた。「どうしてヒーローが来るまで待た

なかった」とか言われたがモモタロスたちが入れ替わって、「俺たちが死んでもよかったのかよ!!」と反論してくれた。それにこの事件でいじめっ子は近づくことはなくなった。

こうしてヴィラン達とモモタロスたちのおかげで僕は虐められることもなくなった。

そしてあっという間に中学生になった。

僕は八百万さんと同じ中学に入って、今僕たちは一緒に帰っている。

それから八百万さんから年々、何故か凄く慕われるようになった。それを皆になんでだろうと聞いたところ、『バカか?』『はぁ、全く良太郎は。』『まぁ、しょうがいなやろな。良太郎なら。』『百ちゃんかわいそー』

などと何故か酷評された・・・・

「野上さんは何処の高校に受験するつもりですの?」

「僕は雄英受けるよ。今でも小学生の時のような事件が起きているのだったら僕もそれを止めたいし。」

「まぁ、そうですの!!私は野上さんと一緒の学校に行けるのですのね!!これは運命ですわね!!」

「入るとは決まった訳じゃないんだけど・・試験もあるし・・・・・」

こうして一日一日が過ぎていった。

乾巧編　パート1

俺には夢が無かった。

いちいち五月蠅く言ってくる教師に

「夢を持ってることがそんなに偉いのかよ!」

と言い返すぐらいだ。

別に夢がなくても小さな目的さえあれば人間生きていけるもんだ。

なんで夢が必要なんだよ・・・・

自分は皆の学校の発表が一番嫌いだった。それに個性だけで人を比べることしか出来ない奴らも嫌いだ。

中学1年

「ねえ、巧。」

「・・・・なんだ?耳朗。ギターの練習なら今日は無理だぞ。」

近所のギター弾ける海堂直也っておじさんに教えてもらって相当弾けるようになった。そして彼女は「耳朗響香」音楽好きな幼なじみだ。

「そうじゃなくて、また給食のスープを残したでしょ。」

バレてた・・・・そう、俺は極度の猫舌だ。インスタントコーヒーなんて絶対ぬるくしないと絶対飲むことは無い。

「あれいつもの給食にしては熱すぎるだろ。」

「いつまでも子供なこと言わない。」

「俺は熱い物で思い出してしまうんだよ・・・」

「・・・・・・・それは分かってるけど・・・・」

「でも悪いことだけじゃなかった。」

目を閉じて思い出す。

俺の親は小学3年の時、火事で二人とも死んでしまった。犯人は親父がクビにしたＤＱＮたちだった。スーツ姿と赤髪の二人組。腹いせとして俺の家を個性で焼いた。燃える炎の中でＤＱＮたちは笑っている。

ゲスく、汚らしく。

そして両親は黒焦げで人の形にもなってない。

「待ってろ！直ぐに消化系のヒーローが来るぞ!!」

この時俺は見てしまった。ヒーローが炎の目の前でただ立っているだけなこと。

この時何かが冷めた。そうだ、コイツらヒーローは自分が傷つくことを必ずしないんだ・・・たとえ殺されそうな人がいても・・・

そしてその、体は地面と繋がる鎖が切れたかのように軽くなった。

静かに俺はスーツ姿のＤＱＮの一人にに近づいて殴るＤＱＮが吹き飛ぶと同時に、拳から赤く、透明な物がＤＱＮに当たる。ＤＱＮは叫びながら腹を押さえて右往左往しな

がらついに灰になった・・・

それを見た赤髪は叫びながら逃げていった。それを追う警察とヒーローを見てコイツらはなにやってんだと感じた。

この事件は犯人が自分で自分を誤って焼いて死亡ってことになっている。もう一人は逃亡で行方不明。それから熱い物は火事の時のことを思い出すから猫舌になった。無個性だった俺の個性は「灰化」殴る、蹴るをすると物を灰に出来る個性となった。

こうやって俺の心はやさぐれていき、親戚であるクリーニング店『西洋洗濯舗　菊池』の啓太郎と真理さんと幼なじみの耳朗だけ心を開いていた。

でもそんな時、俺は運命の出会いを果たした。

1年前

景色が赤く、熱い。

『ウヒャハハハハハハハ!!ざまぁみろ!!俺を見下すからこうなったんだよ』

俺は立ち上がり、スーツ姿の人間を殴る。

『あぁ?なんだよガ・・・』

『ぐわぁわｙｖ５５ｓｆ５ｆ＿３＊％ぎゃぁぁぁぁおお!!!!?!!?!』

何言っているか分からないが叫びながら暴れている。そして全身から色素が抜けるように灰色になり、崩れていく。

「はっ!?!」

目が覚めた。今俺は河川敷で寝ていた。あれから2年経ったが、未だにあの時の事を夢で見る。

「クソ!!」

地面を叩くと叩いた芝生が灰になった。

「君の個性珍しいね」

「・・・・誰だあんた。」

知らないコートの男性が話しかけてきた。

「俺の名前は桐生戦兎、天・才物理学者です!!」

天才物理学者?知らねぇや。

「あまり近づかない方が良いぜ。俺は殴った物を灰に出来るのだから。あんたも不気味だと思うだろ?」

「別に不気味でもないし怖くもない。ただ少し気になったんだ。だけど今君は何か嘘を

ついたね。」

「嘘？」

「そう。自分自身の得になることない嘘を」

「・・・何が言いたい・・・」

「君の個性は周りからイジメもされず相手にされずヴィランのような扱いを受けただろ？友達も少ないだろ？そんなんで何も思わない人間がいるわけない。なのに自ら嫌われるように振る舞ってる。それが君の嘘だ。」

「いい加減にしろ・・・・」

・・・こいつは俺の何かを怒らせる。

「そうだ、俺を殴ってみてよ。」

「は？聞いてなかったのか？」

「勿論聞いてたよ。その上で殴ってみていいよ。俺は灰にならない。」

「・・・上等だ!!」

立ち上がって桐生の腹を殴った。でも灰にならない。

「な!?ぐわぁーー!!」

それどころか投げ返されてしまった。

「なっ？言ったろ。」

あまりの出来事でポカンとしてた。

「君は対等に叩いて叩き返して笑い合ったりする友達が欲しかったんだろ。」

「・・・何言ってんだよ」

「普通に人に話しかけてもらいたかったしケンカもしたかっただろ？個性のせいで毎日怖かっただろ。」

・・・・え？は？、なんで、こんなに涙が出るんだよ・・・・

「君は今まで頑張った・・・」

その瞬間俺は泣いて抱きついた。背中を叩いた。でも何も起きずにただしっかりと俺のことを支えてくれる。

「そんな君にプレゼントをあげるよ。」

こいつ・・・・いや、桐生さんは俺の手を取ると、手が光った。

「え？なにした・・・んですか・・」

「君の個性の細胞を変化さして、自分で灰に出来るか出来ないかを決めれるようにしたよ。それと君の個性は進化していく。これで・・・君はもう一人じゃなくなるよ。」

桐生さんが優しく微笑んでくれた。

俺は本当に嬉しかった・・・・

バシン！

「なーに子供泣かしてんだ戦兎！」

すると後ろから茶髪の男性が桐生さんの頭を叩いた。

「あっ、万丈いたんだ。」

「いたんだじゃねぇよ、てめぇが呼び出したんだろうが!!」

桐生さんが万丈と呼ぶ人は桐生さんと叩き合っている。楽しそうにケンカしていた。
俺はあの時のヒーローよりよっぽどヒーローな人に出会った。
俺には夢は無いが、「目標」とする人間は桐生さんのような人間だ。

城戸真司編　パート1

少年は今、廃車にもたれかかっていた。腹から血が溢れ、海のように広がっていく。
周りはあちこちで小さい火が出ている。ガラスの破片、アスファルトのヒビ、倒されグシャジシャな自転車に囲まれた少年少女。

「おい城戸!!死ぬな!!城戸ぉ!!」

俺は・・・・あの子を救えた・・・
連・・・泣くなよ・・・・俺は・・・だい・・じょう・・・・

ここで俺の意識は途切れた。
目をつぶってから体感で1分ぐらいしたら目が覚めた。
天上は白く、右には医療器具の山、
口にはマスクがしてあった。
そして左には、ベッドに頭を乗せ寝ている親友。

「心配かけたな・・・」

少年は静かに頭を撫でた。

自分の名は城戸真司。中学2年生だ。
俺はとあるヴィランの事件に出くわして、少女を守った時に赤髪のヴィランによって腹部を貫通された。
そのでも俺は立ち上がり、個性でヴィランを倒した。いや、厳密に言うと多分殺した。
そして親友である秋山連のおかげで病院に運んでもらい、それで3ヶ月間意識不明だったらしい。俺にとっては1分くらいの出来事に感じたが・・・・・

「入るぞ・・・」

病室から髭の男が入ってきた。

「相澤さん・・・」

彼は相澤さん。俺の親の幼馴染み。
ヒーローをやっていて、今や雲の上の存在だって親が言ってた。小さい頃に何回か会ってて勉強教えてくれたりしてくれた。

「真司・・・無茶し過ぎだ・・」

「ご心配おかけしました。」

相澤さんはベッドの隣の椅子にしんどそうに座った。

「ヒーローの仕事は大変ですか?」

「まぁな・・・・なぁ、真司。」

「はい?」

「お前は高校は雄英受ける気はあるか。」

相澤さんから唐突に言われた。

「どうしてですか・・・俺は個性を無断使用した世間からしたら犯罪者ですよ?」

「いや、無理ならいいんだ。ただお前は一人だけで子どもを助けた。あの時ヒーローも警察もいないなか一人で逃げずに立ち向かった。今の若い奴らにはそんなことをするやつはそうそういない。だからお前を誘った。

それに子どもを助ける時、もっと合理的な方法があったはずだ、それを雄英で学んでほしい。」

確かに冷静だったら自分も傷つかずにあの子も助けられる方法があったはずだ。それに、今回は相澤さんが動いてくれたおかげで前科などはつかなかった。

だったら断る理由は無い。

「・・・・分かりました。高校は雄英受けます!!」

こうして俺は1年後ではあるが、雄英の試験を受けることにした。

退院当日

病院には連と両親が来ていた。

「城戸・・・・すまない!!」

「えっ?!なんで連が謝るんだよ。」

「あの時、私がもう少し早く来ていたら・・・・クッ」

連は泣いた。俺を助けれなかったことを悔しく思ってるのか・・・そしてあの時怖かったはずだ。気持ち悪く笑いながら近寄ってくるやつを見たら誰だって怖い。俺だって怖かった。

「もう謝んな。お前のおかげ俺は今ここにいるんだから。」

半年後

今更だけど俺の個性はまぁまぁ、珍しい物であった。元々は鏡の世界を移動する能力たったけど、その鏡の世界で出会ったモンスターであるドラゴンと契約したことによって変なガントレットと数十枚のカードを貰った。ガントレットを前にスライドして、カードを入れるとそのカードの力を使えるって凄い品物。

そして今俺は鏡の世界にいる。

あの事件以来色々と鏡の世界で特訓していた。

「はぁ!!」

ザシュ!!

『■■■■!!』

剣に切られた異型な形の生物は粒子になって消えていく。

「ふう、今日はここまでいっか。」

周りを見て一息つく。さっきまで１０体以上いたモンスターはいなくなって自分もなかなか強くなったと思う。そして近くの反射物に足を入れていき、現実世界に戻った。

「城戸。」

「ん?どうしたんだ連」

「いや、何をしているか気になったから」

「そうか。」

「なぁ、お前本当に雄英受けるのか・・・」

「そのつもりだ。」

連は複雑な顔をしていた。

「卒業したら・・・・ヒーローになるのか」

「それは・・・・まだ、決めてない・・・・」

連の考えてる事は言葉にせずとも理解出来る。あの時の痛さ今でも覚えてる。

これからも色々と考えないとな・・・

悪魔の科学者

桐生戦兎は一人で町をくり出していた。

周りには男女の二人組が後ろへ前へ進んでいく。今日でこの光景は１０日目に突入していた。

「・・・・・・・・・・」

チリリン

「おう、おかえり戦兎。」

「随分遅かったな。」

ｎａｓｃｉｔａに戻ってくるとマスターはいつもどうりカウンターにいた。

万丈はテーブルでカップラーメンを食っていた。しかしいつものプロテインではな

く、「兄貴塩」ってやつを食っていた。

「戦兎?」

帰ってきてからうつむいて黙っている戦兎にマスターは疑問を感じた。いつもなら何か一言放って万丈と言い争いをするのに何故か黙ったままなのだ。

「り、・・・・」

「「り?」」

「リア充を爆発させる発明だ!!」

「「戦兎?!」」

「いちいちリア充共が目の前を通るのが腹立つ!!この天・才物理学者が物理的にリア充を爆発させる!!くそ!!なんで俺たちの先輩の周りには女性がいたのに俺たちだけ!!」

（（戦兎が壊れたぞ?!?!?!））

「ちょ、ちょっと待て戦兎!!女性ならこっちにもまぁまぁいるじゃねぇか!」

「うっせ!先輩方は凄く羨ましいだってＪＫだよ?!美人さんだよ?!ＪＤとかナースとか!!こっちの女性陣は美空に女王にスパイに裏関係に北の首相だし!!

それにお前だって敵なんだぞ!!」

「なんでだよ!!」

「てか、なんの話?女王?てか美空に手ぇ出したらゆるさんぞ・・・・・・」

そんなマスターを無視して、万丈の方を向く。

「てめぇには彼女いただろ!!万丈!!話をそらすが質問するぞ、物理学者とはなんだ!!」

「あっ?!え、えー研究するやつ！」

「3割正解だ、今度から猿から縄文人にしてやんよ。」

「なんでだよ!!縄文人も嫌だよ!!てか残り7割は?!」

「物理を操ることだよ!!!!日本のリア充全員の嫁・彼女を二次嫁してやる!!」

この戦兎の夢はなんでしたっけ?『世界のラブ&ピース』では今していることは人類を絶滅させかねないようなこと。そんなこと出来るかって?この男は出来るなんでかというと、

「「マッドサイエンティスト!!悪魔の科学者!!」」

「知るか!!兎に角善は急げだ!!」

「「善の行動ではねぇ!!!」」

こうして万丈たちは戦兎の悪魔の実験のため、家から追い出された。

「「どうしよう・・・とりあえず・・・寒い・・・・・」」

万丈は思った。

（香澄、元気にしてるか？俺たちは世界を救ったぜ。でも、相棒が何故か暴走して追い出されたせいで、寒くて死にそうです・・・・・・・）

野上良太郎編　パート２

そして今

『もっと腰いれろ!!』

「えい!!えい!!!」

僕は今河川敷で的を鉄の剣で叩いている。小学生の時のヴィラン襲撃を受けて、僕ももっとみんなに全部を頼ることなく戦えるようになりたいと思い、始めた訓練をしていた。

モモタロスによる剣＆ケンカ講座、ウラタロスによるロッド＆女性受けいい習い事講座、キンタロスによる斧＆相撲講座、リュウタロスによる銃＆ダンス講座の四つ。皆最後に個人的な講座をしちゃってるけどこれはどれもスパルタだけど、日に日に体が鍛えられていく。

「今日も頑張っていますわね。」

「あっ、八百万さんこんにちは。」

『よし、ちょうどいい一旦休憩だ良太郎。』

やっと休憩できる・・・八百万さんの作ってくれたお弁当を食べる。やっぱりおいし

いな。
「うん。おいしいよ。」
「ありがとうございます／／／」
『うーん・・・・・』
「どうしたのウラタロス？」
『前から思ってたんだけど、やっぱり良太郎はヘタレだねぇ。』
　ウラタロスに呆れられた。
「へ、ヘタレってひどいよ！僕だってやるときはやる、しっかしとした男だよ！」
　僕だって、僕だって・・・・・
『そう？なら隣の子猫ちゃんを襲ってみてよ。』
「!?!?そ、そそそんな八百万さんをお、襲うだなんて!!」
　なるべく小さめな声で言い返したが、聞こえてたらしい。
「私だったら／／／いつだってＯＫですわ／／／」
「ちょ、ちょっと何言ってるの八百万さん!!」
　・・・・あれ？
「もう・・・・・野上さん、そろそろ・・・って呼んでくれませんか？」
　急に八百万さんの背景が黒くなった。

「え？」
「ですから！百と呼んでください!!さん付けなしで!!」
「えっ?!え、えーと、・・・」
「はやく!!無理でしたらハグしてください!!」
　それはダメだ!!僕にも八百万さんにも!!
「えっと、・・・も・・・百!!・・・さん・・・・」
「もう、野上さんは・・・でも嬉しいですわ。」

『ヘタレ』『やっぱヘタレだねぇ』『ヘタレやな』『ヘタレだヘタレ♪』
　皆・・・ひどいよーー・・・・

試験当日
　筆記試験は百さんと一緒にしたおかげに案外引っかかることなく終わり、実技試験の会場に向かう。
「ここでは百さんとわかれちゃうね。」

「私、頑張りますので!!それにもし野上さんが落ちても私も推薦を蹴ります!!」
「それはダメだよ!!」
こうして百さんと分かれた。
そして試験会場。
実技の内容は至ってシンプル。
それぞれの会場に配備された仮想敵を排除しろってだけだ。但し仮想敵はポイントにより難易度が違う上、０ポイントのお邪魔虫もいるらしい。
そして何よりシルエットを見るに、仮想敵ってロボット。
周りの人達は凄く個性的で正直とても緊張した。
そして、
『はい、スタート』
気の抜けたスタート合図とともに僕は走り出した。
『いいか?この試験での合い言葉をてめぇら忘れてねぇよな!!』
『もちろん』『おう!』『うん!』
「『『『最初からｃｌｉｍａｘだ!!』』』」
走り出してから少ししたら仮想敵が見えてきた。
「みんな・・・行くよ!!」

ポケットから四つの四角い筒を取り出す。それを繋げると剣が作られた。これは四人が持っていた物をエンジニアの父親に改造してもらった〔デンガッシャー〕って武器。繋げ方によってソード、ロッド、アックス、ガン、ナギナタ、ハンドアックスとブーメランになる便利武器。

「うおぉぉぉぉお!!えい!!」

仮想敵を切りつける。しっかりと

切りつけて、機能停止した。

『よっしゃ次!!』

どんどんビルの隙間から仮想敵が波のように出てくる。

『ブッコロス!!』

『ブッコロス!!』

『ムッコロス!!』

『ブッコロス!!』

「なんか一体滑舌悪かったんだけど・・・・でもいいや!!」

しかし少し油断した瞬間に囲まれた。こういう時はデンガッシャーをアックスにして、一回転する!!

「とりゃ!!」

一斉に近づいたことによって囲んでた仮想敵は全部機能停止にできた。
その後近づいて来る仮想敵を力の限り切りつけていった。
「よし!!」
少しした時だった。
ズズン!!
「えっ?」
ズズン!!
何かが来る・・・・・
地響きと共に現れたのは・・・・・・デカい仮想敵だった!!
『おいおいなんだよありゃ?!』
『おぉ、あれは大きいねぇ』
『せやけど、あれ試せる機会やで。』
『そうだよそうだよ!!早くあれやってよ良太郎!』
「うん、分かったよ。」
皆に言われるままに僕はデンガッシャーをソードにして構えた。デンガッシャーのボタンを長押しするとすると電子音が聞こえた。
『〔フルチャージ〕』

『俺の必殺技・・・パート２!!』
「１は何処行ったの?!」
『２になるぐらい強いってことだよ!!』
「その理屈は違うと思うけど・・・来た!!」
　徐々にデカい仮想敵が近づいてくる。
　バン!とデンガッシャーの刃の部分が耀きながら外れた。
「はっ!!」
　すると仮想敵の顔面に空中に飛んだ人の足から赤く、透明なドリルが突き刺さる。
「パギャァーーーーー!!!!」
　鳴き声が聞こえて後ろには５ｍは絶対越えている赤い龍を纏って、何かを付けた腕を構えている人がいた。いや見てたらだめだ!!意識を集中する!!
『「ていりゃぃ!!」』
　デンガッシャー本体を上から切るように落とすと、空中の刃が仮想敵に向かって飛んでいき、脳天からザクザクと足下まで切っていく。
　腰当たりに刃が来ると、
「はぁぁぁぁぁ!!!」
「やぁ!!」

ドリルを飛ばした人はドリルに引き寄せられるようにドリルに向かってキックをし、赤い龍の人が腕を前にすると龍から大きい火球が弾丸のように飛んでいく。

赤いドリルが消えた瞬間に仮想敵の動きが止まり、龍の出した火球は顔面をめり込ませて仰け反らす。

そして全て切り終えた刃はデンガッシャー本体に戻る。

仮想敵は炎で燃えながら真っ二つになって灰になっっていった。

乾巧編　パート２

「俺は本当に桐生さんに会えても良かったと思ってる。」
「あんなひねくれてた巧をそこまで真っ直ぐにした桐生さんとやらに会ってみたいよ。」
「ひねくれてはねぇよ!」
「だって、あの時私たちにもあまり話したりしなかったじゃん。そんなにうちたちのこと信じてなかった?」
「そんなんじゃねぇし、その気になってたら俺はお前ら殺してたかもしれないんだからな。」
　耳朗は微妙にバカにしてきやがった。
「巧は本当にツンデレだね。」
「ツ、ツンデレじゃねぇし!!」
「そう?なら・・・・・」
　すると一瞬嫌な笑顔が見えた後、
　なっ?!目を潤わせて、
「うちのこと・・・好き?」

が?!!?
?!なんだこの破壊力!!
正直に答えたらいいのか?!いやそれともはぐらかす?!あぁ!?どうすればぁ!?くそぉ!?!?!

「・・・・す、好きとか・・・べ、別に嫌いな訳じゃねぇからそこ勘違いすんなよ!!」
「「ハハハハハハハハハハハw!!」」」
周りの皆が一斉に笑った。それに周りから、
「乾はツンデレだ!」
「初めて見た!」
「う、うっせ!!誰だってそうなるだろ!!」
「巧、それをツンデレって言うんだよw・・・・・」
「腹抱えて笑ってんじゃねぇ!!」
今日は恥ずかしい思い出が一つ出来た。この復讐は絶対すぐお返ししてやらぁ!!
耳朗が笑いながら立つと同時に足下を指さして、
「あ、そこにゴキブリいるぞ!!」
「え?!きゃあ!!」
騙された耳朗はこっちへと倒れてきた。それを軽く肩に手を置いて耳元で囁く。

「・・・響香」
ボン!!と耳朗の顔が赤く茹でたような顔になった。
「「「う、うおぉぉぉぉぉぉぉぉお!!」」」
中には、
「やっ、やった!!」という声も。
計画通り!!耳朗は下の名前で呼ばれるのに弱い!!軽く抱いて下の名前に呼ぶことによって、耳朗の羞恥心はマックスを迎える!!
「・・・・／／／／」
ダッ!!
耳朗は飛んでいくように教室を出て行った。
「「「さすが乾!!俺たちのしないことを平然と私怨だけでやってのける!!そこに痺れる憧れるぅ!!」」」
「どうよ!!」
「巧、やり過ぎだ・・・・・」
「なんだよ木場?」
「この後、真理さんに怒られるよ。」
「大丈夫大丈夫。バレねぇって。」

この後めっちゃ叱られました。（真理さん&耳朗に）

まぁ、こんなこともありながら三年生になり、そして高校を決めることになった。
「耳朗、お前高校どうする？」
「うちは雄英受けることにする。巧もでしょ？」
「あぁ、俺は桐生さんのように困ってる子供たちを助けるようなヒーロー、傷つくことを恐れないヒーローになりたい。」
「なら一緒に頑張ろう！」
「おう！」

試験当日
ようやくこの日が来た!!
俺は絶対桐生さんのようなヒーローになってやる!!
筆記試験は万全。実技もしっかりと訓練してきた。
「絶対二人で受かろうぜ。」
「巧・・・・うん。」

会場に入っていく。

筆記試験は自己採点ではギリギリいけたと思う。

そして、

『今日は俺のライヴにようこそー!!!エヴィバディセイヘイ!!!』

シ

・・・・・・・・

ン

『こいつぁシヴィーーー!!受験生の視聴者リスナー!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!アーユーレディ!?ＹＥＡＨＨ!!!』

プロヒーローの「プレベントマイク」による挨拶は皆反応に困っていた。

そりゃ、今から試験受けるぞって緊張している時にそんなことされても乗るに乗れないだろうよ。

そして実技の内容が始まる。

・受験生は１０分間演習場で仮装敵を倒してポイントで競い合うらしい。

・持ち込みはＯＫ

・アンチヒーローな行為はご法度

、とのこと。

耳朗とは分かれて会場にバスで向かう。

町中のような会場につくと、

『ハイスタート』

はっ？行っていいのか？・・・まぁいいか。

とりあえずダッシュする。

『ブッコｒ』

ガシャッ!!!

仮想敵がビルから現れた瞬間に俺はぶん殴る。

俺の個性は桐生さんのおかげで変わった。まず掌や拳から赤いビームが出てきて、叩いて赤いビームが体内などに入るとと〆〔ファイ〕の文字が現れて相手を吹き飛ばす。

その次にキックだけど、これは何故か赤く透明なドリル状になって出てくる。これは強力であまり対人戦では使えない。パンチと同じようにドリルが入るとφが現れて、相手が吹き飛ぶ。

「さぁ、どんどんかかってきやがれ!!」

俺は手首を軽く回して、仮想敵の群れを殴りに殴った。

だが少ししてから今までのやつより大きいやつが現れた。

・・・・これはパンチだけじゃ無理だ。ならキックで決めてやる。

キックでやるなら無防備な顔面を狙う方がいいな。だが、どうやって顔面に当てよう・・・

デカいやつは俺がジャンプしても届かないし・・・

そう考えながら後ろ向くとなんかドラゴンがいた!?なにあれカッコイイ!!

あっ!!いいこと思いついた!!

「そこのあんた、ちょっとドラゴンで俺をあいつの顔面の高さまで持って行ってほしいんだが。」

「?まぁ、分かった!!だったらこいつの上に乗ってくれ。」

「ありがとう。」

俺はドラゴンの上に乗ると、勢いよく上に向かい、あっという間に顔面の高さまでき

た。でもドラゴンに上がってもらってる時にデカいのが下のやつに攻撃する寸前で俺は急いだ。それと後でドラゴンに本当に感謝しよう。

ドラゴンからジャンプして足からドリルを出して顔面にさす。

「はぁぁぁぁあ!!!」

ドリルに向かってキックをするとドリルは更に勢いをつけ、気づいた。

これではだめだ・・・・

久しぶりだけど・・・・こいつを灰にする!

そう思った瞬間に更にドリルは深く入る。こんなドリル今まで出なかったのに、

「なっ?!」

そして貫通した。穴を開けることなく、浸透するかのように貫通した。

貫通した後地面についてデカいのがどうなったか急いで振り向くと、

仰け反って灰になっていく。

しかも真っ二つになって、

・・・・これポイント無いけど、一体誰が壊したことになるんだ?・・・

こうして試験は終わった。